

# 白選五十一首



## 宮 英子

みや・ひでこ 1917年、富山市生まれ。北原白秋主宰の「多磨」に入会し、宮柊二を知る。44年柊二と結婚。53年「コスモス」創刊、筆名瀧口英子として実務を担当。86年柊二死後、本名宮英子に戻り、「コスモス」発行人を務める。

白妙の麻にて髪を結ふこともしづかに産屋うぶやに入らむとどのひ

坐りゐるわれのうしろに疊擦る幼子きこゆ這ひて来しゆゑ

切口のそろふ炭火に手を焙りあぶ百日ももかの冬も過ぎむと思ふ

やはらかく日差し射し入りペンを持つこぶしの影のなかに字を書く

元結もとむすびをつよく締めたる髪の根の張りつつをあり生きざらめやも

寒ければ新聞を折りて背に入れぬ立ちあがるとき紙は騒ぐも

爪切りて撒けばおのれが形見とも沙漠の土にまぎれゆくべし

風わたる氷河湖ありて水面を雁翔がんだちゆけり五、六羽なれど

飛び去りし雁の行手の天霧あまきらひ万里へだたる夫をこそ思へ

ひぐらしの不意に鳴きつつ声澄めば話をやめて夫も客も聞く

病む夫が夜よるもはめゐる手套てぶくろを指揉むごとく湯にひたし洗ふ

〔婦負野〕

〔葱嶺の雁〕

一九三七（昭和十二）年に北原白秋先生の

「多磨」に入会した。「多磨」は、その前年に

創刊されたばかりで、香気あふれるフランス

調のアンカットの雑誌だった。先生を中心と

する毎月の歌会は、日比谷松本楼で開かれた。

私にとって、今思えばまさしく宝石のように

得難く輝く時間だった。しかし、先生は一九

四二（同十七）年に他界され、「多磨」は五

二（同二十七）年に終刊。

つづいて、宮柊二を中心とする「コスモス」

が創刊され、否いやも応おこもなく、自宅に編集室が

置かれ、その事務に従うことになった。

当時、柊二は日本橋の会社に勤めていたの

で、帰宅すると夜明けまで執筆した。そして

出勤のあと、その原稿を清書して、昼休みの

夫瘦せて三十九キロその身体支ふれど重し男の骨格

〔花まゐらせむ〕

生きたまへ刹那刹那の呼吸吸気ひた目守りゐつ生きたまふべし

通夜の夜のひとりごころや棺の蓋あけて注ぎたる一掬の酒

亡き柩二あらはれ出でよ兵なりし君がいくたび越えし溱沔河

うつしみのわれは腹へりて飯食ふに夫の仏飯凍てつつ乾干る

杜子春を柩二を照らしし天つ星いま沙漠にてわれに輝るなり

誘惑のごときかなしみ洋梨にふと生殖のほひのたちて

〔系それごと〕

痛み頷つは越後をみなに如かざらむ富山生まれは解らうとせぬ

忘れねばこそ、思ひ出さず候 切なく言ひぬ花魁高尾は

眠られず眠らな眠れ夜と朝の幕間のながきただよ

〔幕間—アントラクト〕

やはらかに頬のうち裏甘噛みてひとときひとりの無聊に歩む

シヨパンより後に生まれし仕合に嬰ハ短調作品64番の2

春ごばうさがきすれば夫の鉛筆削りし過去を手は記憶する

フランネルのパジャマをもう着ようかしら朝明け俄かにうす刃の寒さ

夏くれれば山西省の山川のふるさとに似てこころのさわぐ

天蒼々漠地茫茫たり張騫が天馬もとめしロシアトルキスタン

ひつそりと喪葬玉蟬の並びたる故宮の陳列窓死者のより添ふ

くらぐらと雨降る音すあかつきの夢のつづきの海嶺を追ふ

〔海嶺〕

会ふといふ愛しきものを 草に会ふ書に会ふ、まして人にし会ふは

やはらかに秘むる楽しさ 雪を待つ春を待つそして人をし待たん

時間を見はからつて喫茶店などで目を通してもらう。当時の笑いばなしに、会社の門衛さんが「あの宮さんは別居しているのか、奥さんが毎日のように、会社のダンナに会いにくる」と言ったとか。何しろ、まだ新聞社のオートバイの原稿とりも、ファクスもなかった昭和三十年代のこと。私は苦にならず、毎回三鷹の自宅から日本橋へ、そして新聞社や雑誌社へ届けた。

「コスモス」では柩二が欠詠をきびしくいましめた。編集部をはじめ、まず身近な者からということ、おかげで常時歌のことに心が向く習慣がついた。

シルクロード志向は柩二の影響もある。柩二はたくさんの関係書籍を読んでいたが、病気持ちのため旅行ができない。彼はこころよく私の旅行を許した。

私は担当医と相談をし、糖尿病教育入院という、コントロール期間の二週間を旅行に充てた。アフガニスタン、イラン、西チベット、中国の敦煌、ウルムチ、カシユガル、パミール高原など、柩二へ手紙をしたためるように短歌を作った。

柩二死後もこの延長線の旅をつづけ、更に柩二作品のあとをたどるといふ目的での山西省旅行も七、八回行った。ただし私はあくまで「不東の人」。西の方面しか目が行かない。

貝むらさき染めなる絹の編みシヨール投網のやうに肩へかけつも

七十歳を老と呼び八十歳九十歳を老と言ふ今日よりわれは老にぞ入る

かの友はふたたび歌を棄つるならむつひに棄つべしどうでもいいが

睡りは蜜、蜜の癒しの惑溺の長く覚めざれ覚めずともよし

とりたてて惚ぶることのなしとしもありとしも。はや十二年忌

柀二を詠まばすぐ短歌になる安易さを警戒すれどもどうしたものか

ヒンズークシ死の山越えて辿りたるアフガン沙漠碧落孤独湖

星恋は夫恋ならむあらためて真珠光ひとすぢたださす思ひ

ゆつたりとラルゴの時間過ぎゆきて巴里はよし昼寝するさへ

恋人の時間と唄ふシャンソンのサキソフオンのたそがれの霧

「未刊歌集」

花市の立つ朝なればこの町に住み古る人のごとく娘は行く

ミモザの黄、れんげうの黄、えにしだの純黄あふるるニースの若夏

咲きあふれ垂るるミモザ仰ぎゆくわが顔すこし明るみてゐむ

日本へ帰りたいとは思はねど異国に聞けば山鳩さびし

泰西びとに蟬の詩なしと柀二詠めど南欧ヴァアーンズ蟬のオブジェ売る

羽根抜きて糸紡ぐあり殻捨てて脱皮するあり 歌書かんわれも

河幅のもつとも広き黄河沖へたしかに汾河の流れまじらふ

流れきてうねり渦巻き瀾漫せりしづかに刻を拉致しつつ黄河は

見はるかす沖のはてまで河おもてあな惜しや惜しや、惜しの黄河や